

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：84601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2013

課題番号：21320152

研究課題名(和文) 日本中世の葬送墓制に関する発展的研究

研究課題名(英文) Advanced study of the funeral and grave system during the Medieval Period in Japan

研究代表者

狭川 真一 (Sagawa, shinichi)

公益財団法人元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：30321946

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,900,000円、(間接経費) 3,570,000円

研究成果の概要(和文)： 中世葬送墓制に関する研究会を4回開催した。墳墓堂の研究と武士の墓と石塔の研究では、武士は貴族の墓を模倣して墳墓堂を造営し、のちに堂内へ石塔を納める形となり、石塔のみで十分に機能するように変化。さらに石塔墓が秩序をもって群を構成するようになり、武士の一族墓へと発展することはわかった。その背景には火葬の普及と家の継続性の主張という観点が注意された。副葬品の研究では埋葬方位や姿勢と埋納品との関係が注意され、一定の作法に従ったものは汎西日本的に広がっていることがわかった。当初計画したすべての項目を達成した。

研究成果の概要(英文)： During the research period we held meetings four times to discuss the funeral and grave system during the Medieval Period in Japan. Results of the study on shrines and on graves and tombstones of the warrior class revealed that at the beginning the warrior class had been built shrines imitating the styles of the nobles, then they began to shrine tombstones inside of those buildings. Later, tombstones themselves began to function.

Furthermore the warrior class began to build group graves with tombstone in order; based on this custom family tombs of this class had been developed. Notable points of the background of this development were the spread of cremation and deep attachment to the continuation of the family and/or clan. Concerning the mortuary goods, we examined the relationships among the direction of burial and position of the dead, deposit. Therefore we have recognized some specific patterns in accord with the manners spread in the whole western Japan area.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：中世墓 葬送墓制 石塔 火葬 副葬品 墳墓堂

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、平成 15～18 年度に特定領域研究『中世資料学の総合的研究』のなかの「墳墓および葬送墓制研究の観点からみた中世」研究班の研究代表者を務め、さらに平成 19 年度に継続した同題の特別研究促進費を活用して、日本全国の考古学的に調査された中世墓の資料を網羅的に集成した『中世墓資料集成』(全 10 巻 14 冊)を完成させ、その成果は最終年度に開催した研究会で報告するとともに、科研費終了の翌年度に刊行となった『日本の中世墓』(2008 年、高志書院)として完結した。ここでは先の『資料集成』が基礎となっていることから、「屋敷墓」「集団墓」「火葬墓の展開」「石塔の受容」「墓の画期」などのテーマを設定して地域別に整理した。

またこれと並行して特定の課題(「遺棄葬」「中世の火葬」「石塔の受容」の 3 課題)を深めるために別の研究会を開催して検討し、その成果は『墓と葬送の中世』(2007 年、高志書院)として刊行した。

これをまとめるにあたって、多数の研究参加者の参加をみたことから全国的に中世墓研究の意識が拡散され、浸透することとなり、中世葬送墓制研究の扉は大きく開かれることとなった。

2. 研究の目的

上記の研究活動で飛躍的に進展した中世墓研究であるが、当然のことながら個別具体的な課題は大きくなり、それらを追跡、検討する必要が生じてきた。本研究ではこれまでの成果を踏まえたなかで 5 つの課題を抽出し、互いにリンクさせながら研究を深めることを目的として実施した。

その課題は[A]火葬の研究、[B]火葬人骨の研究、[C]石塔と墓の関係に関する研究、[D]土葬墓の副葬品からみた葬送儀礼の復元研究、[E]墳墓堂の研究、である。

5 つの課題の内容は次項で解説するが、これらの研究を進めることで、中世墓が権力者占有のものから庶民のものになるまでの過程を明らかにしたいという大きな目的に近づけることが可能になると考えた。またそのなかで、庶民が墓を造営できるほどに経済力や社会的位置を身につけてゆく過程を明らかにすることができると思った。

3. 研究の方法

研究目的に掲げた 5 つの課題を互いにリンクさせながら、且つ研究分野も考古学だけでなく、文献研究や民俗学研究、美術史的研究、さらにテーマによっては自然科学的研究などを取り込みながら、中世葬送墓制研究を進展させる。具体的には各研究課題に対応した研究会を開催し、研究の成果を確認するとともに、成果の公開を行うという方法で臨む。

また、上記のスタンスで実施するにあたり、これまでに構築した人脈を大いに活用し、す

べてのテーマに可能な限り全国的に視野を広げるとともに、前回までに果たせなかった東アジアに視点を向けた研究も積極的に取り入れる方向で進める。

4. 研究成果

まず課題別に整理する。

[A]火葬の研究

中世の火葬の実態は焼土坑の存在でその手法を知る手がかりを得、絵画資料からその風景を復原することが可能である。中世は露天で火葬が執行されていることはあきらかであり、インド・バラナシのガンジス川岸部で現在も行われている火葬の実態調査を行った。とくに執行後の床面に注意して観察したが、土の床面で直接執行するというよりも灰などが蓄積された上での作業であり、単純には火葬の痕跡は残らないものであると認識できた。日本の場合、中世後期になると通気目的の土坑が穿たれることで痕跡を明確しているが、それ以前はインドでの手法と同様に薪を積み上げるなどして執行したとみられ、しかも河原で実施された場合、直接的な痕跡を考古学的に見つけ出す困難さを痛感した。逆に言えば、痕跡が見いだせないことこそ、絵画にみられる風景やインドでの実態に近いものであったことを物語るものと言えよう。

これを踏まえて、文献史料から読み取れる火葬の風景について、平成 24 年度に研究会を実施した。文献史料の強みとして当時の葬送作法の実態を具体的に読み取ることができたことは有意義であり、これまで積み上げてきた考古資料や絵画資料との比較研究を行って、より実態に迫ることができた。

[B]火葬人骨の研究

奈良県三郷町持聖院出土の蔵骨器内に納まっていた火葬骨について、九州歴史資料館の協力を得て 3 次元 CT によるデータ化を行い、事前に内部の様相を把握したのちに内部の人骨を取り出す作業を行った。このことで収骨手順をあらかじめ推測したうえで作業ができる点が有効であることと、埋納状況の記録が容易に行え、視覚的に復原することが可能な状態の中での作業となることから、蔵骨器の内部調査には有効であることが認められた。また取り出し後は人骨鑑定を委託に出し、成人男性骨であることを得たとともに、その蔵骨器にまつわる伝承との比較を行った。もとより確定はできないが、可能性を絞り込むことには成功したといえる。

[C]石塔と墓の関係に関する研究

この課題は幅が広いので、主として中世の前半期にみられる大型石塔の造営と墓との関係を探索してみた。特に武士の墓所という観点で大型石塔群を有する遺跡をピックアップして調査した。なかでも栃木県足利市樺崎寺跡の状況は武士の墓の成立から発展段階を知るうえできわめて重要な情報を保有していることがわかった。下記[E]の課題と

連動することでより明確になったわけだが、足利氏の場合、当初は墳墓堂を敷地内に散在的に建設していたものが、13世紀後半頃に複数の石塔墓に置き換わる様相が見て取れた。墳墓堂は本来、機能を失った段階で再建されることはないと言われているが、墓地の継続性をその造営者が主張する必要性が高まったことや先祖祭祀を行うということが定着しつつあること等が背景となって、崩壊する墓所ではなく、ながく同じ地に建ち続ける墓所を必要としたのであろう。しかも、モニュメント的に1基を保有するのではなく、何代にもわたって継続して墓地が営まれてゆくことに意義があり、その点で石塔が群を構成するようになる。そうなると次は一定のまとまりで整備を行うという流れになり、墓所が整備され、一族墓としての体裁と景観が整うのである。樺崎寺跡の場合、その流れを発掘調査成果で追いかけることができる点、石塔の多くが現存している点など有効な情報を保有している重要な遺跡であると認識できた。

この視点に立つと、類似の遺跡は意外に多い。ただ墳墓堂を認識できる遺跡はほとんどなく、石塔が中心である。たとえば神奈川県称名寺では墳墓堂こそ無いが、残された絵図から石塔の覆堂の存在が立証され、のちに露出型の石塔へと変化する様子が理解でき、実際に遺跡も現存しており貴重である。

この絵図および先の樺崎寺跡の成果、さらには他の武士の一族墓地の多くに共通する事項として、墓地の一角に共同納骨施設を有することがあげられる。石塔を建立できるのは、おそらくその一族の当主クラスに限定されると判断できるので、一族の他の成員で当主に所縁の深い人物が同所にまとめて納骨されたのであろう。一族の墓所としての姿がより色濃くなっていくのである。

なお、上記の成果は足利市で研究会を開催して公表し、要旨集も作成した。

[D]土葬墓の副葬品からみた葬送儀礼の復元研究

中世における土葬資料は中世前期の12～13世紀に顕著で、以後は火葬が主流になる。再び近世に近い時期に土葬は復活してくるが、いまだその事例は少ない。ここでは12～13世紀の土葬墓でしかも副葬品を伴って調査された事例を整理し、研究会を開催した。

その成果とその後の調査事例を踏まえ、京都で平安時代中頃に発生した屋敷墓の作法が発展したもので、汎西日本的に広がりを見せていく。まず畿内に広がり、12世紀後半頃までに北部九州にまで入り込んでいる。埋葬遺構の選地から屋敷墓の作法であることは理解できるが、埋納される遺物のあり方もかなり似通った出土状況を示している点で、ほぼ同じ作法を持った共通する集団による布教行為と重なる可能性を考えるに至った。また埋葬の主体者はその遺跡のあり方から、地域の領主クラスに該当するものと推定

できた。また、南九州の事例が蓄積されつつあり、それらは14世紀に近い時期になって成立する。南九州へ普及するまでには大きな時間が必要であったとみられ、その背景の追求は次の重要な課題となった。

[E]墳墓堂の研究

先述のとおり[C]の課題とリンクすることで歴史的な位置が明確になった。その点は[C]のところで記述したのでここでは重複を避ける。

それに先立って実施した墳墓堂の研究会では、考古学的な視点での遺構や遺跡の認識法にむつかしさを感じる結果となったが、文献的には分担者の史料整理によって記録上の実態が明確になったことは大きい。

これらの成果を総合すると、平安時代に記録上で認識される貴族の墓は、考古学的にあまり認識されていないので、その実態比較は難しいが、中世に差し掛かる頃の最高位の墓制として中央の皇族や貴族が採用した墳墓堂が武士にも採用されている事実が明らかになった。しかしその出自を踏まえると、当時の政権担当者としての武士が墳墓堂を採用するのは自然な流れであろう。

先にも示したように墳墓堂は石塔墓へと移行する。もちろん没落してしまった貴族や武士は、その系譜をたどることはできないが、続いて登場する武士団は石塔群を中心にした墓所を成立させている。墓所の機能は、家の永続性を願うとともに、その地を継続して治めているという主張へのモニュメント的な役割も果たすことになると思われる。

これと並行して活動する地方の領主クラスは、屋敷墓を成立させ、子孫の繁栄を願うようになってきている。屋敷の守護はもとより家の永続性を願う意識が成立していることがわかる。この階層はのちに丘陵部へ墓を移行し、石組墓を中心とした群集する墓を形成する。ここに同じ土地での継続性の主張が生まれていることが理解できるのである。

以後、各階層とも墓は増加し、小型化・量産化の一途をたどる。規模も抜きん出たものは少なくなり、同じような規模のものが多数造営されるようになる。これは造墓階層の平準化が進んだと理解しており、社会を構成する人々の多くが墓を持つようになっていることがわかる。こうしたあまり格差のない社会が形成されたからこそ、下剋上が起こりうると考える。社会的システムが未だ発展しない時代での平準化ゆえに、わずかに勢力を得た人物や集団が次の社会を担う予備軍となり得たのであろう。

そのような混沌とした社会に終止符を打った行為は、葬送墓制の観点からみると、織田信長の葬儀と墓の造営であろう。豊臣秀吉が信長の葬儀を司ることによって、権威の継承を主張したと考える。以後、秀吉は京都を見下ろす丘陵上に巨大な墓を造営する。ここで墓は再び権力の象徴として復活し、江戸時代の大名墓へと受け継がれてゆくのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 32 件)

狭川真一、埋葬と寺院、歴史読本、査読無、第 58 巻第 11 号、2013 年、178～183 頁

狭川真一、近畿、近世大名墓の世界 季刊考古学別冊、査読無、20 号、2013 年、108～112 頁

山口博之、出羽の中世墓、最上氏と出羽の歴史、査読無、巻号無、2013 年、239～251 頁

山口博之、板碑と木製塔婆、中世人の軌跡を歩く、査読無、巻号無、2013 年、317～336 頁

勝田至、中世の火葬 - 燃料と拾骨を中心に -、文献資料が語る火葬の風景、査読無、巻号無、2012 年、16～19 頁

狭川真一、九州の五輪塔、中世石塔の考古学、査読無、巻号無、2012 年、79～96 頁

狭川真一、光得寺五輪塔群の復原と旧景観、中世武士の墓と石塔、査読無、巻号無、2012 年、12～21 頁

山口博之、石造物の諸相、山口県立博物館研究報告、査読無、第 30 号、2011 年、41～48 頁

山口博之、中世前半の追善仏事 - 石造物銘文より -、石造物の研究、査読無、巻号無、2011 年、217～232 頁

狭川真一、阿育王塔の形について、石造物の研究、査読無、巻号無、2011 年、151～164 頁

狭川真一、木製笠塔婆の検討、野々江本光寺遺跡、査読無、巻号無、2011 年、85～98 頁

中島恒次郎、薩摩・大隅・南島における古代中世の社会像構築にむけて、鹿児島地域史研究、査読無、No.6、2010 年、73～81 頁

[学会発表](計 11 件)

狭川真一、中世武士の墓の終焉、大名墓研究会、2013 年 10 月 19 日、日比谷区図書館

狭川真一、10～12 世紀の日本の墳墓、十至十二世紀東亜都城和帝陵考古と遼文化国際学術検討会、2013 年 8 月 23 日、内蒙古赤峰市巴林左旗林東鎮京都酒店

勝田至、中世の火葬 - 燃料と拾骨を中心に -、第 4 回中世葬送墓制研究会、2012 年 11 月 24 日、奈良県中小企業会館

狭川真一、光得寺五輪塔群の復原と旧景観、第 3 回中世葬送墓制研究会、2012 年 9 月 9 日、足利まちなか遊学館

勝田至、文献史料にみる作法・儀礼、第 2 回中世葬送墓制研究会、2011 年 12 月

10 日、筑紫野市生涯学習センター
中島恒次郎、中世日本海域の墓標 九州、環日本海文化交流史調査研究集会、2011 年 10 月 28 日、石川県埋蔵文化財センター

山口博之、日本海側の墓標 - 東北地方の様相 -、環日本海文化交流史調査研究集会、2011 年 10 月 28 日、石川県埋蔵文化財センター

勝田至、文献にみる墳墓堂、中世葬送墓制研究会、2010 年 12 月 5 日、山形県立博物館

山口博之、東北の墳墓堂、中世葬送墓制研究会、2010 年 12 月 5 日、山形県立博物館

山口博之、山寺の景観と霊場、日本考古学協会 2009 年度山形大会、2009 年 10 月 18 日、東北芸術工科大学

狭川真一、畿内における中世石塔の出現と展開、石造物研究会 2009 年度静岡大会、2009 年 12 月 13 日、アミューズ豊田

[図書](計 2 件)

狭川真一・松井一明(共編著)、高志書院、中世石塔の考古学、2012 年、378 頁

狭川真一編、高志書院、中世墓の考古学、2011 年、244 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

狭川 真一 (SAGAWA, Shinichi)

(公財)元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：21320152

(2) 研究分担者

山口 博之 (YAMAGUCHI, Hiroyuki)

(公財)元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：90470278

中島 恒次郎 (NAKASHIMA, Kojiro)

(公財)元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：30510177

勝田 至 (KATSUDA, Itaru)

(公財)元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：90211846